



撮影：深堀瑞穂

### 詩人 谷川俊太郎さん

たにかわ・しゅんたろう / 1931年東京に生まれる。21歳のときに、第一詩集『二十億光年の孤独』を発表。以来、詩作のみならず、絵本や翻訳、作詞なども手掛け、海外でも高い評価を得ている。

### 子どものころの本とわたし

**ぼく**はひとりっ子で、家にひとりであることが多かったから、子どものころは模型づくりなんかが好きだったんです。上手ではなかったけど。本よりも、手を使ってなにかをつくることのほうが好きだった。でも、ぼくの父親が哲学を勉強した人だったということもあって、生まれたときから、本の壁に囲まれて育ったようなものです。だからじつは、本にはちょっとうんざりしていたんですよ（笑）。あまりつよい愛着がないんです。もちろん、自分が育っていくうえで本が必要だったとは言えると思います。でも、親に「本を読みなさい」と言われたことは全然なくて、風邪をひいて寝ているときなんか退屈なので、家中の本のなかから気になるものを抜きとって読んでいたのは思い出しますね。

は退屈たいくつかもしれない。  
そこで、絶対ぜったいおもしろく読まなきゃならないんだ、おもしろく感じない自分がわるいんだと思わないほうがいいですよ。  
自分がつまらないと感じるものは、自信をもってそう思っていていい。自分なりの好き嫌いをハッキリもてていけば、あとから読み返したとき「あれ、これ、あのときはつまらなかったけど、いま読むとおもしろいな」と思えることもあるから。つまらないと感じられるからこそ、おもしろいとも感じられるわけだね。  
最後に、詩との出会いについてです。みなさんが「ちよつとおもしろいな」とか「好きだな」と思える詩に出会えればいいなと思いますが、それは運しだいかもしれない。そういうものをおもしろいと思えるかどうかは、人それぞれの生まれもった性質もありますし、偶然の出会いみたいなものに左右される場合がほとんどです。どれだけ別の人が勧められなかったって、続かないものは続かないからね。もちろん、詩のようなものに関心がもてなかったら、別の

自分の好きな方向に進んでいけばいいわけです。  
詩のようなものになにかひっかかりを感じて、詩の世界に入ってみたくなったとき、かならずしも詩集からはじめなければいけないわけではありません。じつは、詩以外のものの中にも、ちよつと詩的なものが潜ひそんでいるということはよくあるんです。いろんな芸術とか、あるいはみなさんが普段聴く音楽の歌詞なんかにもいいものがある。そのようなものが入口となって、詩に入っていく人もいます。  
もしだれかの一篇の詩を読んだあとで、その作者になにか感じるものがあったら、その詩人の詩集を読んだら、その作者の別の詩はおもしろくないと感じるかもしれないけど、でも、そういうものにも触れることで、しだいに詩の世界は広がっていくんです。



もっと楽しくなる！  
詩の読みかた

言葉の芸術のなかで、詩はいちばん自由なものです。ふつうの文章のように、ひとつのことを伝えるためのものでありません。だから、家電のトリセツみたいな気持ちで読みはじめると楽しめなくなってしまう。詩というのは、意味がひとつではなく、たくさん重なっているものではないということもあるでしょう。でも、それでいいんです。読んでみて、「なんか、いいな」と感じるだけでいい。作者だって、一篇の詩についてひとつの答えをもっているわけではありません。  
詩を読むときに、理解しなきゃと思うと、それが詩に近づくと邪よこしま魔まになってしまいます。みなさんが歌を歌ったり音楽を聴いたりするときは、そんなことで悩んだりしないでいいでしょう。詩もおなじように考えてみてはどうだろう。詩は目で読む

### Q & A コーナー

- 質問** 詩はどんなときに読むのがいいですか。  
**谷川さんの答え** 別にどんなときでもいいですよ。子どものころのぼくみたいに、退屈したら開いてみればいいんじゃないかな。詩を特別なものとして思わなくていいですよ。別のものを読んでいて、ちよつと詩も読んでみるかというのでもいいと思いますし。もし詩というものに関心ができたら、やっぱり静かなところで、ひとりで読んだほうがいいよね。あんまりがやがやしたところで読んでいても、なかなか頭に入ってこないでしょう？
- 質問** 詩は自分なりの受けとめ方があっていいですか。  
**谷川さんの答え** もちろんです。詩はそのように楽しむものですから。詩は意味が何層にも重なっているものだから、ひとつの正解があるわけではありません。だから、自分なりに受けとって、なんかいいな、と思えばそれでいいんです。逆にすぐに説明がついてしまうような詩はあんまりおもしろくないよね。よくわからない場合でも、そのことを否定しないようにしていれば、その詩に近づいていくことができるんじゃないかな。

谷川俊太郎さんの本の紹介

『二十億光年の孤独』  
(集英社文庫)  
谷川俊太郎 著  
W・I・エリオット / 川村和夫 訳

『ぼく』  
(岩崎書店)  
谷川俊太郎 作 合田里美 絵  
川村和夫 訳

書くことにチャレンジする君へ  
ぼくが子どものころは戦争中で、戦地の兵隊さんにもつけて手紙を書かされていました。でも、なにを書いていかかわからなくて、母にそう言っていると、なにが遊んだことでも書けばいいのよって言われた。それが難しく、「戦地の兵隊さん、そつちは書いてしょう？」なんて書いたら、兵隊さんは寒いところに行っちゃったりして（笑）。だから、すらすらと書けない人の気持ちはわかる気がします。もし本当に作文に困っている人がいたら、目の前にあるものや人を題材に書いてみればいいんじゃないかな。書いていこうと思うし、つぎの言葉も浮かんでくると思うし。そのようなものの中にも、ダイヤの原石のような言葉があると思うんです。